

# るの は な

編集兼発行者

千葉大学医学部

るの は な 同窓会報編集部

〒280 千葉市亥鼻1の8の1

千葉大学医学部庶務係気付

電話千葉(0472)22-7171内線2012

千葉大学医学部同窓会報 第72号 題字 鈴木五郎

## 獅膽鷹目行以女手について

名誉会長 鈴木五郎

会長を退いてからもう十年を過ぎ、卒業してから五十有八年、級友百数十名の所八十九名も他界された。地元で鑒録として活躍していた大先輩花岡名誉会長、市川理事も既に逝かれた。今更のように表題の格言について回想反芻し、現時点での思を述べてみたいと思ふ。編集委員からも句の出所などきかれたが不勉強で今日でも窮めていない。併し乍ら之が私の限りなく尊敬する恩師三輪徳寛先生が選びに選んだ最も得心のいったものとして外科を学ぶ者に対して示された名言と思えば唯鶴呑みにして今日に至ったのである。今にして

更に広く深く解釈するようにもなり、少なくとも千葉医科大学乃至千葉大学医学部を卒業した同窓すべての医師にとつての生活信条ともなるものと理解し、広く医界に誇示したく思うのである。この立派な文句が果してどの位人口に膾炙しているかを思うとき事の意外に驚く程である。

およそ名言などといっても喝え人の如何にもよるべく、同じことでも孔子曰くとか毛語録にあるとか或はカントが云ったとかいうと片言隻語と誰も世人のよく首肯するものである。原典が何であらうと我々は三輪徳寛先生が高く掲

### 獅膽鷹目行以女手



大正8年卒業生アルバムより転載・外科臨床講堂前壁の大字は、明治30年代に千葉師範教師香川海石氏の書になるもの。(三輪徳寛先生伝記より)

げた格言として受け入れたのである。所が今三輪徳寛とは如何なる人ぞと言うと同窓とても必ずしも深く知る所はないかと思う。偉い先生だという。或時偉いとは何かとの問が出たとき松村豪先生が西郷さんは偉い人だということと同じことだよと言われたことがある。とまれ三輪徳寛は明治二十二年から大正十三年二月まで在職した外科学教授であり、千葉医学専門学学校長から千葉医科大学初代学長であり、先生の徳容風采まことに格別なものがあつた。大教育者としてまた外科医としての名声は学の内外に高く真の師表と仰がれたのである。晩年ながら私は直接師事することが出来て、おのずから医師たるの心構えが成長したように思っている。先生の伝記は吉川春次郎先輩の肝いりで昭和十三年二月十九日に刊行され七百頁に余る膨大なものである。およそその人を知るに足る。又昭和四十年には先生誕生百年を記念し、緒方富雄司会の下に三輪徳寛先生顕彰座談会が催され、その記事は「医学のあゆみ」第五十四巻第一、二にある。因にこの会参加者は緒方富雄(司会)、谷川久治、滝沢延次郎、湊頭、花岡和夫、松村豪、宮田量之助、松岡登、福田保、田村一、石母田昇、兼卷和一、鈴木五郎で

ある。このことからでも三輪徳寛とは如何なる人かを窺い知ることが出来る。このときも獅膽鷹目の語が出て緒方教授が記念講堂の何処かにぜひ何かのかたちで壁にうめこまれることですと云った。こうした先生の遺訓とも云うべきもので繰り返し語り伝えられて生き続けるべきものと思う。三輪先生の意図した所は三輪珍談百題附補遺なる珍書に詳しい。要は蘭語の独訳 Ein Doktor muss ein Falkenauge, eine Jungferhand und ein Loewenherz haben と言う句を見出し、獅膽鷹目云々は恐くシールポルトに師事した蘭学者で且つ漢学者であつた人が訳したものと云うといい、この方面に詳しい方々、富士川游その他にもたずねたが訳者は遂に不明といつてゐる。呉秀三著シールポルト先生、其生涯及功業(大正十五年第二版)なる千四百頁に余る書物にも、富士川游著日本医学史にも手がかりはない。広く調査はしなが長尾藻城先輩の先哲医言にも見えない。蓋し名言にして名訳というべきだが原典についても私は知っていない。

一九二二年 The American J. of Surgery に Gordon K. Smith of The Compleat Surgeon という一文があつて読むと同じ意味のことがあつて独逸文殊に邦訳漢文に比するとどうも直截簡明でな。A Chirurgien should have three diverse properties in his person. That is to say, a heart as the heart of a lion, his eyes like the eyes of an hawk, and his hands as the hands of a woman. These words were written by John Hall in the sixteenth century. 云々。

古くは昭和十六年十月二十一日付朝日新聞の学会余瀛に東北大学名誉教授杉村七太郎博士が次の様に述べてゐる。即ち「嘗て千葉医専病院を訪ねて三輪徳寛先生から臨床手術講堂の壁面にかかけられた獅膽鷹目行以女手についてきいたがその出所は不明であつた。私の調べた所では十七世紀の英作家トマス・フラー Thomas Fuller (1608-1661) の小説良医から出たもので後にオランダやドイツに伝つたものと思う。以上の文句は一般に科学に志す者の座右の銘たらしむるに足ると思う」と。私は他大学の教授から之が問題にされたのは初めてのことと思ふ。

昭和四十三年(一九六八年)第三十回日本臨床外科医学会総会が千葉で開催された。総会会長は千大第一外科教授細賀重雄であり、このとき三輪徳寛七十二歳左筆になる獅膽鷹目行以女手と独文の Ein Doktor muss ein Falkenauge, eine Jungferhand und ein Loewenherz haben. を刻した文鎮をつくり記念として私の簡単な説明文を付し役員に配布し好評を博した。

昭和五十一年(一九七六年)大田三郎が Clinic Magazine にこの句の扁額のことをあげ「先人の教えを明かにしよう」と訴えた。大田とは昭和九年千葉医大卒の嶋田宗之君のペンネームである。私の話

(次頁へ)

# 琉球大学に赴任して

小張 一峰 (昭和15年卒)



大学の隅で毎日蒼い海を眺めています。

私は、大正十二年(一九三三)以来船橋に住んでいます。ところが、近年なかなか千葉県内に住みつけないのです。二十五年間勤めた駒込病院から長崎大学に移って五年、さらにWHOでマニラに四年、最近の四年間は浜松医療センターに勤務、今回ついに本邦最南端の沖縄に来て、首里城跡の琉球

けれども大仕事な上に、すでに保健学部附属という異例の大学病院があり、それを医学部に移行させる難題をかかえております。平素のご無沙汰を顧ず、同窓の方々のご支援とご協力を切にお願いいたします次第です。

浜松を去るとき、ゐのはな会の方々が盛大な会を開いて下さいました。当地でも近頃ははな会がもたれるということ。年をとるにつれて、母校への郷愁がだんだん強くなるようです。玄奘台の桜がゆつくり眺められる身分になりたい、などと愚痴が言いたいところですが、とにかく引受けました仕事、最後の「奉公」思っ出て来るところまでがんばる所存です。同窓の皆さまがたのご健勝をお祈りいたします。

(五四・一二・三)

# 長柄「ふる里村」村長の辯

元千葉大学長 相磯 和嘉 (昭和11年卒)

ここに書く「長柄ふる里村」は特定の考え方や伝統の保存を目指したのではないので、武者小路の新しい村、明治村、あちこちの文化村、学者村を真似ているわけではない。私が命名したのではなくあつから私は参加した。房総半島中央部、茂原市と市原市にはさまれて長柄町がある。

地元出身の企業者が、ぶなや杉を主体にした雑木林を高級住宅地として、開発するために構想したもので、私はこれに賛成して発起人として協力してきたわけである。一口三百坪の林の中に、一定のルールを守りながら自然とけ合った居住が出来るようにということである。ここを生活の拠点としてあらゆる活動を営む人達が集って

村作りをする。私はその世話役をする為の村長ということである。会社はこの構内に管理センター(旧スイス大使館)、カナダ方式の高級コテージ五十、レマン湖を形どった湖のようなプール、沢山のテニスコート、梅林、桜の園、栗林、つり堀など超デラックスな諸施設の建設を終えて高級レジヤンセンターとして発足した。

わが村はこの会社の経営とは一応別に自主的に自然そのものに囲まれた静けさを保持した村にするつもり。私は小さなカナダハウスの山小屋を建てて週末をここので過ごし、久しぶり雑木林のなかで小鳥



前面に広がる水は、美しい国スイスのレマン湖を象った直線130mのラク・レマンと命名されたプールの一部です。水面に映る建物物はスイス政府より村に寄贈された旧駐日スイス大使館です。

をかねて村長の辯とします。

近詠二首

夜来雨あがりて樹々にさす  
光あまねくやさしふる里村は  
枯葉厚く敷き積む庭を照らす  
月かかる豊饒をわれ知らざりき

外科医の心得として残された箴言ではあるが杉村七太郎博士も云われたように一般科学に志すものの座右銘たらしめるに足るもので、良医たらんとする者に必須の三徳知仁勇の象徴と理解する我等は医学部創立百周年記念祝典を機に書家浅見喜舟に依頼し、その揮毫になるこの名句を医学部長室に掲げて永く伝えられることになった。同窓の者機あつて部長室を訪れたこの名句を味ってほしいと思う。



前頁より

# 各地るの は な 会

## だより

### 江戸川るの は な 会 秋期総会開催

都内で最も会員の多いのが江戸川るの は な 会では、例年春秋に集まりをもっていますが、昭和54年度の秋の総会を11月20日新小岩の「有田」で開きました。大学からは井出源四郎医学部長、佐藤研一歯科口腔外科教授に御出席を戴きました。地元小岩保健所長として長い間御活躍なさった竹蓋壮一郎先生昭和19年卒が本年で定年を迎えられ、葛飾日赤の部長に転ぜられたので、特に御出席頂きました。集会は、中村民比古東京るの は な 会長(昭和13年卒)・小竹稔夫江川るの は な 会長(昭和14年卒)の挨拶に始まり、井出教授の大学の現況報告を伺いながら盆を重ね、佐藤教授の歯科科のお話の終る頃には、雰囲気盛り上って来まして、出席会員が自己紹介を兼ねながら本学の国試の現状を憂えたり、母校と同窓生との距離が遠くなったことを訴えたり、例年ない同窓生としての熱のこもった真情あふれる発言が多く見られました。これに対し井出医学部長からは、おなじみの調子で一つ一つ丁寧な御説明があり、あつという間に予定時間が過ぎてしまいました。また当日は珍らしく富塚八十一先生(昭和4年卒)が病身をおして出席され、昔話をなさったのも忘れ難

い出来ごとでした。

当日の出席者は、下記の通りである。富塚八十一(昭和4)・中村民比古(昭和13)・小竹稔夫(昭和14)・福原公明(昭和16)・山上健次郎(昭和17)・岡田毅(昭和19)・小倉一郎(昭和20)・篠原忠吉(昭和20)・有賀一雄(昭和22)・今井力(昭和22)・笠川猛(昭和22)・佐々木守道(昭和24)・一志典夫(昭和25)・目々沢俊夫(昭和25)・中村憲三(昭和25)・滝沢明祐(昭和31)・福田陽(昭和32)・紅谷周(昭和35)・岩倉弘毅(昭和37)・村瀬靖(昭和30)・伊谷昭幸(昭和30)。

なお去る10月25日伊藤理先生(大正9年卒)が脳腫瘍で死亡されました。江戸川るの は な 会、江戸川区医師会にとりまして、大事な方として、大変残念なことであ

り、御冥福を祈ります。

(幹事・村瀬靖・伊谷昭幸記)

### 神奈川るの は な 会

昭和54年10月13日、小田原市の料亭「だるま」にて開催した。本部より小林金市会長・萩原弥四郎教授・奥井勝二講師を招き、津田修二先生・志村正三先生・花島勇先生・中山恒明先生・田中洋先生・北條龍彦先生等約40名程参加して、盛会であった。

### 東京るの は な 会 新年会

東京るの は な 会は、昭和55年1月19日、東京神田東松下町料亭「もとみや」で開催した。本部より香月秀雄学長・萩原弥四郎教授・奥井勝二講師が出席し、学内事情の説明があった。中村民比古会長以下約40名が集い、新年会にふさわしい、初々しいなごやか気分がたたよい盛会であった。

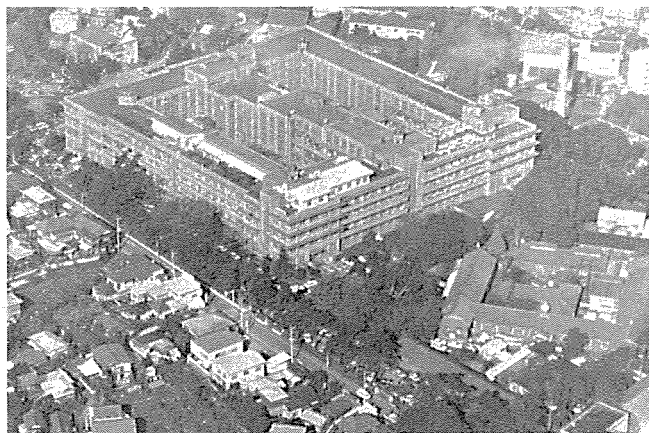
## 安房るの は な 会だより

本年の安房るの は な 会総会は、2月13日(水)、稲垣義明教授、嶋田裕教授をお迎えして、千倉町鈴木屋で開催された。

嶋田教授は、学内の現況をスライドで、稲垣教授は、β遮断剤について簡明に御講演下さり、その後会場を移し、関谷正一(大正13年卒)会長の挨拶に続いて宴会と

昨年までは常勤医師の不足から暗雲たどっていた安房医師会病院(院長野原宏・昭和17年医専卒)にも、稲垣教授から積極的な応援が頂けるといふ言葉があり、出席会員二十六名の中からとよめきにも似た歓声があがった。

両教授と会員との交歓の場も、またたくまに過ぎ去って行った。安房るの は な 会会員が半数を占



旧病院(教育研究棟)の工事は、順調に進み、三月完成の予定である。内装工事その他が残り、六月頃から、各教室・研究施設の引越作業があり、夏休あけには、教育研究棟での仕事が始まることである。

## 評書

### チーバの休日

窪田博吉氏著(昭和20年卒)

後記に「俗に死んだ子の年を教えるようなものだ」というところが、悔いても詮ない過去のことを嘆くことをいい、難かしく書き直すと「死児の齢を数う」となる。……とある。著者が七年前に亡くされた御長女のこと忘れられない心情が処々に表現され、涙をさそわれる。千葉医科大学に入学された頃より最近に至るまでの千葉

める安房医師会には、この他、千葉大学関係者の来訪が相次ぎ、2月16日(土)午後二時より学術講演会、肺癌研究施設渡辺昌平教授、同日午後三時半より第一外科奥井勝二講師・結核予防会志村昭光先生・第一内科出身日暮協先生により、安房地区総合検診反省会が、館山市安房医師会附属安房看護専門学校で開催された。

以上のように安房地区るの は な 会は、年々隆盛を極め、会員の活動も活発である。

(幹事、橋本孝平・小谷庸・柴田耕三・青木謹)

# 卒業二十周年を迎えた昭和 三十四年卒クラス会開催

卒業二十周年を迎えてのクラス会が、益々お元気な恩師の柳沢利喜雄、中山恒明、三輪清三、竹内勝、北村武、川喜田愛郎、小林龍男の諸先生と当時教務係だった大賀信子さんをお招きして、54年12月1日、千葉クラブにおいて盛大に開催された。

五十名の級友が参加(出席率六二・五%)したが、長野から春日、野口もかけつけ、久しぶりの再会に、各々旧交を暖め、近況を語りあい、ホステスは口をさしはさむ余地がなく手もちぶさたになる程話がはづんだ。

白髪が目立つ者やアデランスが必要と思われる者もかなりいて、

## 明治天皇 御親筆 (五面参照)

昭和十四年五月十三日徳大寺宮内卿ヲ以テ陸軍少将篠原國幹ヲ被爲召下總國千葉郡之内原之地ヲ習志野ノ原改稱陸軍訓練場ト被相定候旨別紙御筆ヲ以テ御渡相成候事

業についての提案があり、今後、五十嵐、遠藤、榎本、原沢、等が幹事となり、計画を進めていくことになった。二次会は「波奈」に席を移したが、ここにも四十名が出席し、カラオケでうたう者もいて、夜の更けるのも忘れ、二十年前の学生時代にかえった気分の一

夜であつた。

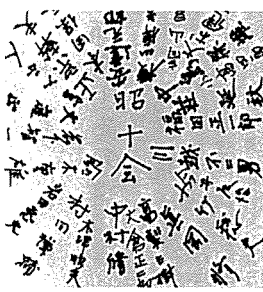
翌日の有志でのゴルフコンペでは、東がハンデ8の赤星、玉真をおさえて優勝した。

(川名正直)



## 昭和十会 (昭和14年卒クラス会)

昭和十四年卒のクラス会は、卒業四十周年を記念して、去る昭和54年2月22日・千葉市新港、ニューパークホテルで開催した。当日の



出席者は、安達元郎、今井辰治、大庭正、小高四郎、福田正一郎、岩下智一、大村健二、鈴木重雄、莊延秋、高梨三樹、中村脩、真岡修、正宗幹夫、宮入正人、村田謙輔、大倉正二郎、岩田恵夫、小竹稔夫、木津順夫、高山晃、中島保雄、本田保三、横山卓夫、川越不二男(順不同)の二十四名で、久しぶりの再会で、旧交をあらためた。なお当日欠席の野沢保之氏他多くの方から近況報告の連絡があった。

## 軟式庭球部OBの集い

海鳴りの聞こえる外房の一角で家族ぐるみのわが「アタック会」の笑顔をご披露致します。軟式庭球部を卒業してなお学生時代のあの和気藹々の「時」を忘れられない我々39年卒を中心に・40年卒その前後のコート仲間が年に一度は、昔にかえろうと此の集いを作り数年が過ぎました。

今では家族をも含めて、今回の如く一泊、夜のふけるのも忘れて大いに学生時代を満喫しました。二世達が昔の我々を見るようにでした。日一日と変貌していく、現今各自各方面で医療に従事するのけわしい生活の中の一ひとききに学生時代の和やかさをこんな形でこれからもずっと持ち続けたいと思つて居ります。(井出勝康記)

写真に向つて右より  
阿部一憲(小児科、39年卒)・万本盛三(外科、39年卒)・鈴木直樹(産婦人科、39年卒)・加藤元一(小児科、40年卒)・武者広隆(内科、40年卒)・小池良夫(外科、38年卒)・百瀬昌人(内科、40年卒)・今野貞夫(小児科、39年卒)・井出勝康(産婦人科、40年卒)

## 千葉大学関係者の主催する学会・研究会

- 第7回尿酸研究会  
日時・55・2・7・会長第二内科熊谷朗教授・会場東京神田錦町・学士会館
- 第21回日本臨床細胞学会  
日時・55・6・11・会長長香月秀雄学長・会場 千葉市民会館他
- 第17回術後代謝研究会  
日時・55・7・17・会長・第一外科伊藤健次郎教授・会場・千葉県教育会館
- 第39回日本公衆衛生学会  
日時・55・10・29・31・会長柳沢利喜雄名誉教授・副会長公衆衛生吉田亮教授・小林金市千葉県医師会長・長井和行千葉県衛生部長・会場 千葉県文化会館その他
- 国際肝臓研究会  
日時・55・11・5・10・会長第一内科奥田邦雄教授・会場 Hyatt Regency Hotel, Chicago.
- 第32回日本気管食道学会  
日時・55・11・7・8・会長・第二外科佐藤博教授・会場・千葉県教育会館・千葉県自治会館





# 国立習志野病院だより

香田 真一 (昭和31年卒)

習志野の地名は明治天皇の御命名によるとされている。明治6年4月西郷隆盛、篠原国幹らをお伴にして陸軍の大演習に幸された折、当地を習志野と命名され御自ら筆におさめられた。その写しは当病院院長室にかかけられており、御参考のために同封しましたので陛下の肉筆を御覧下さい。以来、当院の前身は陸軍病院として栄え、終戦後は厚生省の下に国立病院となり地域医療にたずさわるようになった。

昭和43年、老朽化した建物は全く想像も出来ない位の病院に改築され、現在なお外来管理棟、病棟およびR棟の増設を行ない、精神科を除く全科の診療に従事し、ベッド数四〇〇、外来患者は一日六〇〇〜一〇〇〇名のぼつています。さらに附属看護学校が宿舎と



も院内にあり、一五〇名の看護学生を養成している。病院の裏手には船橋、習志野、八千代および鎌ケ谷の四市による伝染病棟、老人ホームがあり、まさにこの地域における医療の枢軸となっている。又、隣接して東邦大学、順天堂大学、日本大学生産工学部さらに習志野警察、郵便局があり学園都市の中心的存在である。

真一(昭31)、麻酔科兼小児外科医長伊藤文雄(昭37)、鈴木秀(昭43)滝沢淳(昭45)、新井竜夫(昭53)、整形外科医長長内孝(昭32)、同村山憲太(昭38)、吉野敏正(昭42)、今井克己(昭52)、泌尿科医長外間孝雄(昭37)、山城豊(昭53)、脳外科医長細井湧一(昭44)、佐藤政教(昭44)、土佐純一(昭49)、眼科医長出口強(昭48)、皮膚科医長岩崎光順(昭46)、小児科飯田秀治(昭43)等の諸氏が各科において大学医局と関連をもちつつ日夜努力している。その他忘れてならぬのは病理部門において故滝沢延次郎名誉教授として井出源四郎医学部長にはつとに長い間お世話を通じ、現に岩崎勇助教授の御助力を願っている。又、最近まで放射線科有

## 国立佐倉病院だより

横山 健郎 (昭和36年卒)

昭和54年4月、国立佐倉病院が開院しました。旧国立佐倉療養所が、移転、性格転換を契機に廃止され、国立病院として新築開設されたものです。

この施設の歴史は古く、我国初の陸軍病院として明治7年に設置されたものです。西南の役、日清・日露戦争の傷病者の収容の記録もあります。第2次大戦後、厚生省に移管され、国立病院に改組されたものが昭和25年国立療養所として結核の診療に当って近年に至つていたものです。

昭和41年、明治百年記念行事の一環として、旧佐倉城跡(国立佐倉療養所所在地)に国立民族歴史



見下ろす江原台に、建築面積一万四千平米のベージュと茶の三階建現代建築ですが、病床規模は、現在二百床ですが、病院としては、研究検査部門の設備の比重が並みはずれて高いのが特徴です。すなわち、臨床検査のための最新ME検査機器の他に、電顕室、低温室(4℃、-20℃)、抗原保存室(レフコ超低温槽、液体窒素保存庫)、組織適合検査室、免疫応答検査室(ガンマウェルカンター)、液体シンチレーションカンター)、動物実験棟等、研究活動に対する設備がなされている点です。

この様な状況の昭和44年橋爪藤光院長(昭18病理)が着任、昭和48年に横山健郎副院長(昭36二外)、昭和49年に柏原英彦外科医長(昭42二外)、昭和50年に矢野英雄内科医長(昭39一内)、蜂巣忠外科医長(昭42二外)がそれぞれ着任しました。

さて、新病院の設立については厚生省を中心に、本学、医学会関係ならびに医師会、千葉県および地域団体などと協議を重ね、専門医療機能として腎疾患専門病院を地域医療に対しては基幹病院として診療を行なう方針が決まり、昭和52年着工の運びとなったものです。

その後昭和51年遠藤保利内科医長(昭42一内)、昭和52年に大森耕一郎(昭46二外、米留学中)が、昭和54年に木村純(昭49整外)、渡辺幹夫(昭51二内)、鈴木直人(昭46一内)、榎本和夫(昭53二外)、宮内大成(昭50泌)の7君参加着任しました。

新病院は、風光明媚な印旛沼を

すでに本病院は、我が国の腎移植の中核的存在(国立腎移植センター)として全国移植ネットワークの頂点に立ち活動を始められており死体腎移植希望千二百名の待機患者を持ち、これまで第2外科の御協力のもとで、35例の腎移植を行なつて来ています。また前述の研究機能を用いて、高血圧と腎関連ホルモン(渡辺)、関節移植(木村)、肝機能と感染抵抗(鈴木)、Bセルタイピング(大森)、胃腸病変の成因(蜂巣)、腎移植(柏原)、糸球体疾患(矢野)、等の研究も着々と成果をあげています。

当病院は、今後研究棟、研修棟を備えたナショナルセンターを目ざしてなお発展途上にあります。るのはな同窓会におかれても、前にも増して御援助と協力力をお願いすると共に、若い同窓の諸兄に広く同志を集めるものであります。

(所在地)千葉県江原四七三  
(電話)〇四三六八二一五

## 第23回東日本医科学学生 総合体育大会、準備進む

前号71号で予告した、東医体会は、本年7月下旬より8月上旬にかけ、千葉大学が主管校で開催される。この大会は、医科学学生のスポーツの奨励と加盟大学相互の親睦和を目的として、その使命を果たしつつ年毎に盛大になっている現状である。本学としては、昭和37年に第五回夏季大会を主管したことは、ご記憶のかたも多いと思いますが、主管校が一巡し、18年ぶりの二回目の主管となったわけ、この間大会の規模も年々大きくなり、現在では参加校34校・種目数25、参加人員一万人を越える大きなスポーツの祭典となっております。このような大規模な大会を運営いたしますには、質素を旨としておりますが、多額の費用が必要とすることは、申すまでもありません。同窓会会員各位に募金の趣意書が届いておるかと思ひますが、御協賛御支援をお願い申し上げます。募金の計画は、左記の通りです。

### 記

- 一、目標額 二百五十万円
  - 一、一口二千元
  - 一、期限 昭和55年4月
- 右計画について、お問合せは千葉大学医学部厚生係 白沢 浩 大会運営委員長

## 会員名簿について

### お知らせ、お詫びとお願い

①昭和五十四年版のものは同窓会会員名簿が昨年暮にでき上り、予約申込をされた会員にはすでにお配りしましたが、ご残部が多少ございましたので、ご入用の方は同窓会本部宛お申し込み下さい。一部三千円(送料別)です。

②なお今回の名簿は発行を急ぎましたため、かなりの誤りが見受けられますので、目下正誤表を作製中であります。お気付の点がありましたら、三月三十日までに同窓会本部までお知らせ下さい。

③同窓会の地区会員名簿は、別刷として現在作製中です。これは本来住所をもとにして地区別に分けたものですが、実情に合わせるため、今回は支部役員名簿もつけ加えることとしました。各支部における支部長、支部幹事名簿をお知らせいただければ幸いです。この方のメロも三月三十日までとし、前記正誤表とともに五月頃にお届けする予定です。ので、なにとぞ協力下さい。

## 伊藤健次郎教授退官記念式典

本年四月一日付けを以て医学部教授を停年退官予定の伊藤健次郎教授(第一外科)の退官記念式は、左記の通り行なわれる。

- 一、日時 昭和55年3月15日(土) 午後一時三十分
- 二、場所 医学部記念講堂

## 新会員歓迎会のお知らせ

三月二十四日(金)、学部の卒業式が午前中に行なわれた後、ゐのはな同窓会と卒業生クラス会との共催で、新会員歓迎会ならびに謝恩会が行なわれます。

場所は市内市場町一丁目の自治会館(四〇四七二二七六一八)です。とくに一々お知らせしませんが、多数ご来会下さいませよう、お知らせ申し上げます。

## 三十年史の 頒布について

千葉大学三十年史ができ上りました。本書は昭和二十四年の千葉大学発足以来の本学の歩みを綴ったもので、B5版一六一七頁に及ぶ大著です。書中では総編、部局編に分けて統合の経過や各部局の発展の経緯がまとめられています。一冊九千三百頁程で頒布できるそうですが、部数の関係でお申込順に一定数に限定されるそうです。

## 常任理事会報告

部久我哲郎教授(昭和26年卒)が再任された。

昭和五十五年二月二十二日、記念講堂南側会議室で常任理事会が行なわれ、左記の事項が決定した。

- 一、五十五年度の年度内計画
- a 五十五年度同窓会総会は来月六日(土)午後、東京で行なわれる予定。
- b 四金会とはりあえず次の三回を予定。
- 四月二十五日(金)、十一月二十八日(金)、五十六年二月二十七日(金)

## 四金会のお知らせ

昭和五十五年第一回の四金会を左記により行ないます。

今回はこのお知らせ以外、とくに各先生個人にはご通知をさし上げませんが、あらかじめご出席のお返事がいただければ幸いです。

### 記

昭和五十五年四月二十五日(金) 午後六時より  
同窓会館二階にて  
会費 三千円

なお同日四時より記念講堂南側会議室にて、常任理事会を開催いたします。

## 生物活性研究所長 久我哲郎教授再任

近く任期満了になる生物活性研究所所長に、同研究所薬理活性研究

## 人事移動

○木内政寛氏(法医・昭和39年卒) 助教昇任(54・12・1)

○工藤純孝氏(産婦人科・昭和35年卒)・助教昇任(54・12・1)

○赤井淳一郎氏(神経内科・京都府大・昭和33年卒)・講師昇任(55・1・1)

○天神弘尊氏(産婦人科・昭和45年卒)・講師昇任(55・2・1)

## 編集後記

一九八〇年代を迎え、国際的・国内的に厳しい諸情勢のなかで、新年度第一号のゐのはな同窓会報をお届けします。巻頭言として、鈴木五郎名譽会長から玉稿を頂戴致しました。先生は、19世紀の末のお生れと拝し、八十一才と聞いております。毎日お元気で、国立千葉病院へご出勤されておると承ります。ご同慶の至ります。新年度第一号の巻頭言として誠にふさわしい意味深いものがあります。後進のわれわれは、多忙な毎日の生活のなかから、ときおり原点にもどり反省しつつ、ときおり必要と道を見出して行く心構えが必要かと、読後感が湧きました。

○前号71号一面「千葉大学而立を祝う」の記事、左記の通り訂正します。

一段8行稲井文部事務官↓井内事務次官。

三段10行村山大学学術局長↓大学局長佐野局長。(奥井勝二)

## 表彰

○石橋祝氏(昭和22年卒・山武郡成東町白幡一六三)・国際児童年、身体障害者福祉法制定三十年記念全国福祉大会が、昨年11月2日、日比谷公会堂で開催され、当日、多年にわたり児童福祉事業の推進に貢献、その功績が顕著であるとして、厚生大臣表彰を受けた。